

尾張

尾張町界隈の老舗と名所の由来

現在に生きる歴史の息吹



日 次

はじめに

尾張町界隈

小間井宏尚商店

越友商店

町民文化館

村松商事

福久屋(石黒商店)

宗重商店

紀陽館(森井書店)

両砺銀行(すし捨本店)

望月眼鏡店

黒田香舗ローソク店

松田文華堂

高橋莫座店(タカシキ)

五 一

昭和劇場(太陽生命)

石野テント商会

小島理容室

細字印房店

佐野商舗

ふとんのタカハシ
ムコダ

村上洋品店

山田時計店

一二

武部サイクル商会(合晋不動産センター)

森忠商店

森八本店

二三

二三

二四

二七

二八

二九

三〇

三一

三二

三四

三三

三四

三田商店(末徳金沢営業所) ·····	一五	美味村	·····	三五
南陽堂書店	·····	一六		
一九席(丸西)	·····	一八		
河合洋品店(日本電建)	·····	一九		
光画社	·····	二〇		
石川県里程元標	·····	二〇		
かれき橋	·····	二一		
橋場町(懸作り)界隈	·····	三六		
東田葬法堂	·····	三六	ト一亭	
大樋長左衛門	·····	三七	林菓子舗	·····
金城樓	·····	三八	志村金物店	·····
俵屋履物舗	·····	四〇	牛坂家具センター	·····
金子生花店	·····	四一		
主計町界隈	·····	四二		
新町界隈	·····	四三		
新橋	·····	四四		
新町界隈	·····	四五		
新橋	·····	四六		
久保市神社	·····	四六		
	·····	四九		

福助座(和田歯科医院)	四七	新町分署(高田整形外科医院)	五〇
泉鏡花生家跡	四七	木倉屋	五〇
佃食品	四八	石谷	五一
武藏界限	五三			
丸越百貨店(ダイエー)	五三	大和田銀行(福井銀行尾張町支店)	五八
中六商店	五四	五十嵐金店	五八
市姫神社	五四	近江町市場	五九
中島めんや	五五	加能合同銀行(北国銀行武藏ヶ辻支店)	六一
不室屋	五六			
寿屋	五六			
あとがき	六三			

はじめに

城下町金沢は、加賀百万石として一般にはおつとりとした街として知られています。確かに江戸時代は最大の外様大名前田藩の統治の下、金沢城の石垣下に住いした庶民は、宝生能や友禅染め・九谷焼きに代表される文化や伝統産業に育まれて来ています。都市人口もお蔭様で江戸、大阪、京都について四番目という勢いででした。

又、近年に至ると浅の川界限では泉鏡花、犀川界限では室生犀星等を輩出し、単なる住宅及び産業都市とは明らかに一線を画した個性を持っています。一方では、金沢城内に歩兵第七連隊だけでなく第九師団本部もあり、中京北信越一帯の関連家族で賑わったりしていました。これらを与えられた状況に満足しきつたくらいが、ある意味では戦後の経済発展に一步遅れを取つたと言えなくもありません。しかし地道ながら、金沢の産業は国家プロジェクトの一環や大手産業の下請けでなかつたが為に、極端な発展こそ望めませんでしたが、しっかりと自主独立の力を付けて実力を増してき続けています。

時代をさらに遡のぼつてみれば、城下町金沢の発端は中世の商業集落である山崎村凹市にまで至り、山崎村凹市から久保市から懸作りから尾張町となり、一向一揆衆以来の底力を持つた庶民や商人のしぶとさを発見することになります。特に前田利家が尾張名古屋の荒子地方より引連れて来たといわれる商人達の力は、特筆に値すると言えましょう。現在老舗と

して残っている商店の大半はこの街にあるのもうなづける道理です。

町を歩けば空から謡が降つてくる程の金沢名物、誰もがたしなむと言われる宝生流謡曲の、中でも代表的な「鶴亀」の一節、月宮殿の中に「、秋は時雨の紅葉の葉袖。冬は牙えゆく雪の袂を。ひるがへす衣も薄紫の。雲の上人の舞楽の声々に、」と謡われる情景そのまことに金沢は四季を通じて、人々の心の「ふれあい」を最優先にして、自然との共存を日本民族の深い部分で共用しています。現代の車社会の中では、つい忘れがちな生まれながらのこの足を使って町並を歩く時、不思議と思考スピードは歩く早さに合い、平素気の付かなかつたことに注意が行くものです。この古い標識の意味は、薄汚れてはいるがこの看板の文字は何と書いてあるのだろうか、等々発見るべき事柄には事欠きません。

金沢市がコンベンション都市構想を掲げて、全国に金沢の良さをP Rするのも、香林坊周辺の近代化と共に、車輪の両輪の一翼を担う尾張町界隈の歴史と伝統があるからこそだと考える訳です。そしてこの伝統は、先人がどういうことを成してきたかということに重きを置くのではなく、どういうことを目指していたかに視点を定める時、老舗が何故今日まで栄え、今尚未来へ向つて発展し続いているのかが理解されるのではないかと思います。三代五代、中には十代以上引き継がれて来たのは、単に時間の継続だけでは計れるものではないのです。例えば、尾張町で家業を継ぐ人は何人おられますか?と問われた時、私達は

殆ど全員と答えられます。古臭いように見えますが、尾張町若手には引き継いでも良い魅力とやり甲斐があるのです。

歴史と社会を時間・空間軸とし、伝統から未来への産業工芸県を目指す、全国でも希有な文化県のシンボルゾーンたるべく、尾張町は大きく羽ばたいています。常に本質的な意味で時代を先取りし、変わることのない人々の心を大切にして行くことに、商い(飽きない)の厳しさと暖かさを感じ、私達は掛け替えのない価値を「いま」「ここに」見いだしつつあります。この置き換えることの出来ない価値のもと未来の可能性へ向う時、連綿と続く老舗の伝統は生き生きとして参ります。先祖があつてこそ存在し得た私達、そして私達故にさらに未来へ存在して行く限りない子孫達。大きな連鎖を形成しつつ、忘れるべきではない事柄を古老の話を中心に、以下この街の個々のお店や史跡の由来を述べ綴りたいと思います。これにより、将来から未来へ続くビジョンの基礎にしたいと考える由縁です。

尾張町

加能郷土辞彙には

“金沢の町名。「十二冊御定書」に載せる金沢通町割附に、「三町二間五尺、尾張町」と見
れる。町名の由来は明らかでない。「博伽雜談」には尾張荒子から引越した足輕・小者の住
した所とし、「加府事迹実録」にも利家が荒子から召連れた下人の住所であつたとするが、
「三州名跡志」には、利家入城の時分、荒子で用命を承つた町人を召寄せて居住せしめた所
であるとする”とある。

現在尾張町本通りといわれる場所は、博労町交差点より橋場町方向へ向かい、枯木橋た
もとまでを指す。近年、町名統合により周辺地域一帯が全て尾張町の名になつてしまつた
ものの、昔は尾張町・上新町・下新町・鍵町・橋場町・母衣町・主計町・上今町・下今町
・殿町・袋町・博労町・桶町・市姫通り・武藏とそれぞれの町名をもつていた訳である。
尾張町も厳密に言えば、参勤交替の行列の通つた下尾張町と上尾張町(望月メガネの処で
別れていた)に昔は区別されていた。その発祥に關わる由来等詳しく述べ、尾張町商店街振
興組合・尾張町若手会で出版の小冊子「加賀國尾張町」及び「尾張町物語」「尾張町繁昌記」を
参照して頂ければ、ご理解出来ると思います。

実際、藩政時代のみならず、明治維新後の近代に於けるその活性力も、まさに目を見は
るものがあった。金沢城の正門前に位置し、医王山に發して金石から日本海へ流れ出る浅

野川の水に恵まれ、懸作りの橋場界隈を擁し、分家した新町、ロマンの香り漂う主計町、又劇場等が並んだ河川敷きの並木町の対岸には東の廓をも見る。遠く仰けば臥したる竜に似たといわれる臥竜山(卯辰山)を眺望し、一方加賀藩の台所近江町市場に代表される武蔵界限の賑わいとも接する、人と文化の一大交流点として重要な位置を占めていた。現在に残る有名な老舗が店舗を構えると共に、例えば金沢の著名銀行の多くがこの尾張町に発祥を持つていていることも、それだけ繁華な街であった証査であるといえる。おそらくに出来ない先人の遺産を活用すべく、誇りを持つて時代を担う若手が最も活躍している町並でもあります。

小間井宏尚商店 尾張町一の一の七

大正八年、初代栄次郎が当時素材としてあまり出回っていなかつたゴム製品を手懸けて、ゴム履物の小間井商店として発足したのが創業の年になる。以降、常に時代に先駆けて洋風の靴の普及にも貢献し、北信越に於けるこの業界の指導的役割を果たして來た。

昭和三十九年、三代目宏尚の代となり、小間井宏尚商店と社名を改める。宏尚は先代譲りの商才と若さのものと、多様化する時代の要望を敏感に取り入れて巾広い活動を開始。昭和五十七年にはブティック事業部を併設し、スカイプラザに「サロン・ド・コマイン」を出店

する等の実績の持主である。現在は日本教育シユーズ北信越地区協議会支部長を勤めると共に、日本教育シユーズ協議会の専務理事を兼任して益々活躍している。

越友商店 尾張町一の一の七

本家は小立野の越友商店であり、昭和九年に分家して越田他喜男氏が尾張町で独立したのに始まる。当初は遠方の東京、大阪、京都、名古屋といった処の業者と横のつながりを持ちつつ伸びてきた。市場を金沢の中だけでなく、広く全国に向けて羽ばたいたことが結果的には成長要因となつた訳である。古九谷の分野が得意であり、その筋では全国に越友商店の名は知られている。

昭和三十三年、慶一が二代目を引継ぎ、お茶道具を得意とした美術品が主流となる。慶一は表千家の村上宗信に師事した、この道では誰にもひけをとらない見識の持主であり、店内に並ぶ品々にはハツとするものが多い。中途半端なものよりも、本当に良いものしか買わないという金沢人の気心をくすぐるような品揃えは、何よりも店主の気持を現している。「今後は新しい九谷焼き、漆器をも含んで、金沢を訪れる人の目を楽しませて上げたい」と言う瞳の奥にキラリと光る情熱は、これからさらなる発展を暗示しているかのようである。業界では、近江町にある金沢美術俱楽部の世話をし、美術協同組合の監事を歴

任中。

又、末弟の和好も昭和四十七年に越田静和堂の名で今町に店を開き、昭和六十一年には片町ラブロの美術街に出店をしている。

町民文化館 尾張町一の一の八

現在町民文化館と名付けられたこの建物は、明治四十年（一九〇七）に金沢貯蓄銀行として新築落成し、その後北陸銀行尾張町支店として昭和五十一年まで開行しておりました。

銀行の支店統合整理の関係で同年、北陸銀行より石川県に寄贈、石川県有形文化財に指定され、その後十年余り石川県郷土資料館分館・町民文化館として開館しておりました。

昭和六十一年六月、尾張町商店街振興組合に運営移管され、老舗の伝統を漂わせつつ、将来へ引き継がれていく新しい郷土文化の創造の場として、尾張町周辺の個性ある活性化のシンボルとなつて開館しております。

〔建物概要〕石川県有形文化財（建築物）昭和五十一年指定。主体構造は木造平屋建、建坪約二〇四平方米で、外部を塗籠土蔵造・黒漆喰仕上とし壁腰部に石川県産の赤戸室石を積込む。入母屋・瓦葺の反りを持ち棟上に一对の鶴を立てる城郭風の主屋根をのせ、内部は壁、天井とともに白漆喰仕上で、装飾は精巧な左官細工、柱や扉、窓の額縁は木造りで様式

的装飾を付し、銅色のワニスで仕上げて白壁とコントラストをなす擬西洋建築様式である。特に内部の柱は、エンタシスと呼ばれる、その表面に縦に附けられた僅かな膨らみの在る様式の柱で、現存する数少ない貴重なものである。

村松商事 尾張町一の一の一二

宝永七年（一七一〇）、初代徳左衛門によつて「村松屋」として創業する、別名「烟草屋」とも称した。藩政時代に、金沢・江戸間の書状遞送に従事した江戸三度飛脚という制度があり、四代目徳右衛門がその設立に参加した。又、八代目徳左衛門が天保十年（一八三九）に江戸三度飛脚の頭取となり、以後村松の姓を名乗るようになつた。一時、陶器販売業を行つたりしたが、九代目徳左衛門に至り、江戸三度会所に勤め、安政三年（一八五六）には帶刀を許されている。

現在の糸、ボタン、旗類の取扱いは十二代目七九からである。当主は「江戸三度」を出筆し、鶴甫という俳号を持ち、美術にも造詣が深かつたが、一方妻ちかの協力の下に日清・日露の両戦争により七連隊を相手の商いを伸ばし村松家の富をさらに大きくした。明治二十四年に糸商を始め、戦後昭和二十四年に株式組織となり、昭和三十九年に創業七十周年記念として社屋を新築する。同四十年に村松商事（株）に社名変更。同四十二年には富山店

を新設する。一方、村松旗株式会社及び北陸カタン糸株式会社を設立し、^々 村松グループとして業界に不動の基盤を固めることになった。

現店主七九氏(襲名三代目)は十四代目となる。手芸糸、毛糸、手編製品、服飾関係製品等、幅広い繊維製品卸商の老舗として実績を積み上げている。特に富山店勤務の淳の活躍は、当店の次代の可能性を示している。

石黒久屋 (石黒商店) 尾張町一の一〇の八

石黒家第五代福久屋新右衛門景寿が「牛黃圓」を創製した後、寛文十年(一六七〇)九月、時の加賀藩主前田綱紀(松雪公)の典医堀部養叔より門外不出の三味薬「紫雪」「烏犀圓」「耆婆万病圓」の調合を伝授され、またその製造器具を与えられ、三味薬を調合販売することが官許された。爾来、家伝薬の種類も増え、また他薬も取り次いで薬種商としての活動を代々継続した。

第十八代石黒伝六は、昭和二年(一九二七)十月当時金沢市としては、始めての地上四階地下一階の石黒ビルを尾張町に建築し、石黒ファーマシーと称する小売店を開設。三階広間に歌舞台を設け、定期に能囃子会開催する等粋な金沢らしい心の持主であった。現社長石黒伝六は、十九代目に当り、親睦店薬局を母体として明希株式会社を昭和三十八年十二

月十九日設立されている。同店木造店舗は嘉永六年（一八五三）建築であり、郷土金沢最古建築の一つではないかと思う。

白示重商店 尾張町一の一〇の一二

藩政時代から続く老舗であり、加賀藩のお茶の御用商人としての地歩を占めていた。明治維新後もしばらくは賢坂辻でお茶屋をしていたが、大正の頃には高道町で道具屋をするようになった。この当時、宗守重吉氏の代をもって創業としている。

昭和十年、尾張町に支店を出し（加州相互銀行の前身の金沢無尽と呼ばれる銀行の跡地）、いつの間にかこちらの方が本店となつていった。これは二代目徳太郎の時期に当たる。

解体業の方は、道具屋と併用しつつ、顧客の物件引取り範囲の拡大とともに建物の解体まで引受けけるようになり、徐々に発展して行つた。当初の大きな仕事として、大蔵省発注の旧栗ヶ崎の木谷藤右衛門（金沢を本拠とする北前船の廻船問屋で銭屋五兵衛より格式が上だつた）の屋敷を解体したのに始まる。昭和四十年代には、皇居の新宮殿建設のため道具倉を解体して名譽ある実績を作つてゐる。この建物は現在湯涌の江戸村に移設保管されている。

昭和五十六年七月、徳郎が三代目を引継ぎ変動する時代を的確に捕え、最近は解体業専

門としての宗重商店の堅実な歩みをみせて いる。

幻陽館（森井書店）尾張町一の一〇の一四

明治二十五年（一八九二）十一月六日頃には尾張町の向い側に居た。店歴は約百年程経る老舗である。その昔は尾張町七十五番地に住いし、現住所は十九番地である。

現在は新本ばかりであるが、昔は古書も取扱い、先師藤井準夫氏は明治期元亀田鶴山筆頼山陽註記の稀重書を掘り出したこともあつた。また明治二十七年（一八九四）より陸軍省等と特約、歩兵操典等の陸軍典範令の特約販売をなしていたので有名である。

両砺銀行（すし捨本店）尾張町一の一〇の一五

石田茂和氏はこの業を修得するため、昭和十一年より大阪の南へ修業を行つて いた。ようやく技術的にも熟成して來た頃戦争となり、復員後の昭和二十二年まで独立は待たなければならなかつた。最初は並木町の尾山俱楽部の前付近ですし屋の看板を掲げていたが、翌二十三年に尾張町に出店する。

昭和四十二年、元両砺銀行の跡にビルを建てて いた酒造組合の建物を購入してこれを新店舗とする。同四十八年にはスカイプラザに出店を設けて、益々の発展を図り、現在は昭

和六十二年完成を目指して新店舗ビルを建設中である。

この間、金沢のすし業界に貢献し、特に弟子の育成には熱心であり、またたく間に「すし捨」という名の店が増えている。のれん分けした店の数は十六件を越える実績を誇っている。江戸前の流儀で加賀一の味を作り出し、好評である。

今年夏の新店舗完成を機に、そろそろ二代目をスカイプラザ店長の良男、幸一に任せてさらに新しい飛躍を願うこの頃である。

望月眼鏡店 尾張町一の一〇の二〇

先祖は山梨県の出身で、当初は全国に水晶等を販売する行商をしていたが、北陸の古都金沢に魅せられて住みついたといわれる。初代望月秀吉氏が、大正十二年南町(今の北国新聞の向い付近)で水晶の印鑑屋を始めたのを創業の年とする。

家業の発展とともに、昭和二年には尾張町の現在地(元湯浅時計店跡)に店舗を移し、めがねの専門店として新たな出発をした。この頃のめがねは伊達めがねといって、大正時代から丸型梢円型の金縁めがね(度のないもの)を一枚でもウインドウに並べておく丈で商売になつた時代である。当時は洋服を着て、めがねを掛けていればハイカラさんといわれた。使う人も貴重なものだつたとみえ丁寧に扱い、新品販売よりも修理が多い位のものであつ

たという。

「現代ではめがねは医療用具の一極ですので、お客様の要望に答えられるよう田とめがねに対しての十分な知識を修得して、社会の為に貢献出来ますよう頑張っています」と語る現店主の莊太郎氏。昭和三十二年十一月に二代目を引継ぎ、三代目の息子さん共々尾張町の真ん中で昔より鍛えた腕をもつて一途に眼鏡の販売に創意努力している。

黒田香舗 ローソク店 尾張町一の九の八

寛永三年（一六二六）創業というこの店は郷土に於ける香類の販売特種店である。京都に本拠を持つ日本の香道は藩主前田家を始め、非常に重宝がられていたが、その香を次代に伝える郷土唯一の店である。和漢生薬問屋の片町旧亀田家漢方薬の一切を廃される時の漢方秘伝の一切を継承され、現在に至っている。亀田屋黒田と書かれたのれんがその折のことを物語っている。店内には畠山鶴山書の古看板がそのまま残っている。ローソク、センコウ香類一切のかおり、同店界隈にみなぎっており、伝統を今に感じさせている。

松田文華堂 尾張町一の九の一四

当家は松田左膳（今枝内記の家臣）をもつて祖とする。嗣子はなく、八郎兵衛（一世）を養

い、家業を営むが、染物職のため町人として黒梅屋という。そして刷毛、筆を作成し、三代にいたり平四郎と称し、現在に至る。即毛筆の製造に専念し、生産を拡大する。四代平四郎の頃、京都の経済学者海保青陵より次の額を贈られ、店頭に掲げたとある。それによると、「松氏老廬、貸貢価実、文華堂、青陵鶴書于銅駄坊私塾」というもので、文化十年（一八一三）頃と思われる。これにより、文華堂を号する。幕末の頃、加賀藩の御用を承り、この頃より毛筆の需要が全国的に増え、商売も盛んとなつた。明治十四年（一八八一）六月十日、毛筆を第二回内国勧業博覧会に出品し、受賞した。

また文化三年（一八〇六）加賀藩、京都の陶工青木木米を招聘して、春日山窯を開窯し、四代平四郎が其窯元を仰付けられる。これにより九谷焼きの勃興となつた。尚、青陵自筆本「媚説」並びに、卯辰山、観音院三重塔下図を蔵していると聞く。

吉岡 桜洞廿只座店（タカシキ） 尾張町一の九の一八

創業者である初代の高橋外次は、旧河北郡川北村寺町（現在金沢市）の出身で、旧姓を小寺といつたが、高橋家の養子となり、明治三十五年（一九〇二）現在地に店舗を持つた。当初は俗称を「あたらしや」といわれ、現在のふとんのタカハシのあじち（分家）もある。

燈表、縁布、花蓮、指糸など莫座屋として商いをしていたが、次第に荒物、藤椅子、蚊

帳など時代が推移するとともに取扱い品目も変化して行つた。二代目与一郎を経て、昭和二十五年三代目となつた外与はこうした周囲の商業環境を見通し、社名も高橋敷物店から株式会社タカシキと時代に即応して改める。又商売の形態も初めの小売専業から、卸し問屋も兼ねるようになり、さらに神谷内に商品センターを作ることで広くインテリア工事も手掛けるようになつて來た。

日本オーナメント（JOC本部・東京）のローレルインテリアグループのメンバー店として、畳資材とインテリア製品（カーペット、カーテン、ブラインド、壁装材、応接セット、ギフト用品）の室内装飾総合商社として活躍し、業界での不動の地歩を占めている。

111 田商店店（末徳金沢営業所）尾張町一の八の五

当初は三口屋と称し、唐物店の看板を上げて商いをしていた。やがて藩政時代から明治維新へと変動する中で、徳川鎖国体制からの脱皮を計つて行つた。

当時最先端のハイカラ商売として、店名も三田洋物店と改めて庶民の流行を先取りした。商売の繁盛と共に、さらに店名を三田洋品店と改め、昭和の初期には旧丸越百貨店（現ダイエー）のビル建設と同時に、東京帝国劇場を真似た粋なビルを建てて金沢人の注目を集めめた。建築様式はファサードを構成する玄関周りの石張部分と、タイル貼の壁面のコント

ラスト、窓や入口上部の垂直線を強調した石のレリーフパネルが当時の新しさを助長した。玄関前の一尺余りの円い石柱は、冬場の便を考え、下駄の雪を落とす為のものであつたと聞き伝えられるものである。現店主裕一は三田商店としての五代目に当たり、東京で店舗を開きをしている。

現店舗は二代目小左衛門の折、昭和九年に店を閉じている。しかし、二代目の下で長年大番頭として勤め上げた村上甚太郎が、意志を継いで同年尾張町に村上洋品店を開業している。

現在はこの印象的なビルに、ユニークな企画力を誇る末徳金沢営業所が開設され、次々と時代の要請を先取りしている。

南陽堂 尾張町一の八の七

江戸時代後期より、富山市の総曲輪通りに店を開く古書店南陽堂がその前進となつている。勿論現在も当地に、この店は老舗として現存している。

昭和十四年、当時美人で評判だった柳川ミミさんは、店で働いていた大番頭の昇爾氏と結婚、分家してこの金沢・尾張町に店を開いたのが始まりとなる。以来、一貫して古書を取り扱い、豊富な蔵書と店主の人柄を慕い、旧制四高から金沢大学に至る教授や学生の溜

まり場となつていた。今でも金沢市内だけでなく、東京や大阪からも地図片手にやつてくる人もいる。文化人といわれる人の中では、この店へ入つたことのないというものは皆無に等しい程である。とにかく本が好きな店主で、どんどん揃えるので、その蔵書量は膨大で、店内に入ると別世界を訪れたような気持になる。薄暗い本の山の中にいると、紙魚(シミ)という言葉が何となく実感されてくるのもうなづける。

昭和五十三年には先代の跡を受けて誠が二代目を引き継ぎ、本を生涯の伴侶としている。多少整理したとはいえ、店内の雰囲気は相変わらず異世界のようである。世間の垢に染まっている筆者等にはかえつて、時間を忘れて心を洗うような場所として幼少より忘れられない。単に本を売るのではなく、古くより変らない人の心の「ふれあい」を第一義としているので、売上よりもついついお客様との話が長くなつてしまつのが欠点だとか。現代の我々が忘れかかっているものを思い出させてくれる貴重な店である。

建物は一見平屋建てであり、中に入ると二階建という江戸時代そのままの趣を残している。元三田商店の母屋だったので、参勤交替の行列を上から見降ろさないようにとの、下尾張町商人の奥ゆかしさを感じさせている。それだけに典型的な商家作りとなつており、一二階の間には、例えばテスリ付きの穴が疊二枚分空いている。二階の倉庫へ上つていの店主とお客様が簡単に話し出来、又本の出し入れが簡便に行えるようにとの先人の知恵に

は今更ながら驚かされる。

一九席（丸西）尾張町一の八の八

明治の始め、この付近には田中紙店・鍋谷看板・国原糸店があり、河合洋品店・三田商店とともに繁盛していた。名古屋より来た竹次郎の妻、芸名竹本一九という女義大夫の語りべと十返舎一九に掛けて名付けられた一九（いっく）席は、まだ鍵町のしもた屋（現森八本店の右横の配送ターミナル付近）の二階で興業している程度であった。やがて人気の向上とともに明治三十年頃、尾張町の当地に出て来ることになった。淨瑠璃、落語、浪花節を中心とする芝居小屋は当時の人々に受け、繁華街の賑わいに拍車をかけていた。しかし、大正の頃より西洋活動写真、无声映画の台頭により、徐々に衰退して行き、ついには車社会の到来を反映して昭和二十年石川交通本社になつて、その姿を消すこととなる。

昭和五十一年武蔵ヶ辻再開発を機に、旧栄町石屋小路でのれんを掛けていた丸西株式会社がこの地にくることになつた。丸西煮豆で知られる当社は、大正十年西谷外次郎氏によつて創業され、金沢名産の佃煮の製造販売を行つていた。昭和三十八年に弘次が二代目を引き継ぎ、昭和四十一年には問屋団地に工場と卸し部を作り、発展の一途をたどつていた訳である。しかもこの老舗には、他の何物にも代えがたいシンボルが在るのである。それは高

さ六、七メートルの樺の木である。尾張町に移る時に近代的ビルの店舗を建てたのだが、その奥庭の一角に前の店から植え替えた平凡に見える古木を大切に育てている。高峰讓吉博士が幼少時代（五、十一歳）を過ごした跡地に住んでいたので、ゆかりの樺なのだそうである。「縁起の良い木を眺めていると商売のシリをたたかれる思いです」と言う弘次さんは商人のまごころが感じられる。

河合洋品店（日本電建金沢支店）尾張町一の八の一〇

江戸時代、小間物商・河合栄治郎商店として構場町界隈の中心的役割を果していた。明治維新とともに、時代の流れを一早く見極め河合洋品店として再出発した。特に明治十年の明治天皇の北陸ご巡行が町並を競つて洋風に変えることに拍車を掛けたといつてよい。金沢の洋品店ご三家として、この河合洋品店・三田商店・片町宮市洋品店が上げられる程であつた。後に大和の祖となる井村一族の井村末吉が婿養子となつたのもこの後である。

その後、福井の森田財閥の流れを引く森田貯蓄銀行がこの地で営業を行い、現在は健全な経営で全国に地歩を固める日本電建金沢支店となつてゐる。

光画社 尾張町一の七の八

寺沢某がこの地にスミレ館なる写真館を作り、明治大正の西洋風潮の町並に拍車を掛けていたのが最初である。昭和になってからこの写真館は近岡一族に引継がれた。

くるみの近岡屋で知られる近岡屋の総領息子であった近岡久松氏は、時代の未来を予感し、この商売に新しい魅力を見い出して入った。まず著名写真館で修業し、その実績を見込まれて、栗ヶ崎遊園地の中にあつた写真館をまかされて独立したのが、創業の昭和十年である。やがて昭和二十年九月尾張町に出店し、心氣一転した久松氏は積極的に先進的な技術を吸収し、業界の中で重要な地歩を占めて行くことになる。

昭和五十四年に房治が二代目を引継ぎ、加賀伝統芸能である宝生流能楽の世界等を中心 に、一味違つた写真撮影に務めている。常に新しさの中に古さを、古さの中に新しさを見つけ出し、カメラのレンズより被写体の可能性を見つめ続けている。近年は新しい社会の変化を先取りすべく、コマーシャル写真、ビデオソフト製作等に意欲的に進出している。

石川県田土呂社元標

同標は、枯木橋總構壇右岸に建てている。旧標(木製)が朽ちてしまい、一九八三年金沢菊水ライオンズクラブ、C・N三周年記念として花崗岩造りとして再建されたものが現存

している。その記する内容は

[正面] 石川県里程元標 加賀国金沢尾張町

[右] 南森下へ壹里二十五町三十間

[左] 野々市へ壹里參拾壹町二十四間

[裏面] 明治六年の太政官達により、全国主要街道の府県本庁所在地の交通要所に木柱を建て、この場所を管内諸道の起点即ち元標と定め設置された。元標を起点として県内の町村に至る距離が測定され、併せて管轄境界標柱の建立と地図の作成が行われた。史蹟保存のため旧標文を記し設置したものである。 1983・3・30
C・N三周年記念、金沢菊水ライオンズクラブ

とある。この小里程標は、武藏ヶ辻寄り近江町入口(官許金沢青草辻近江町市場)にも在った。

かれき橋 (枯木橋)

「金沢通町筋町割附」という書に「五拾五間四尺橋場町」とあって、枯木橋から浅野川橋詰までの間取である。元禄九年(一六九六)の「本町肝煎裁許附」に、尾張町と記載されている。この一町をいま懸作と呼んでいる。

この枯木橋というものは、尾張町から浅野川大橋方向にだんだら坂を下るように惣構堀に架かっている橋を指して言われる。

これは元亀、天正の戦乱に久保市乙剣宮社境内の林がことごとく枯れ木となつた。この枯れ木がそのまま年月を経ても放置してあつたところからこの名が付いたとある。近年迄あつた枯木橋の橋わきにあつた枯れ木はエノキであつたという。最近迄あつた天神橋もとの木もエノキであつた。卯辰妙応寺に日蓮上人の木像がある。昔、枯木橋の下から掘り出されたといわれる。

畠田景周の「三州誌」には、佐久間盛政が金沢在城の頃は、枯木橋は城下の町端であった、とある。金沢香林坊橋標も近代化の波に呑まれて無くなり、尾張町にのみ往昔の赤戸室橋標が残るだけになつてしまつた。珍重すべきものである。

昭和劇場（太陽生命）尾張町二の八の二三

第二菊水劇場とも呼ばれ、明治から大正にかけて活動写真、无声映画館として一時代をなした。当時、近隣にあつた劇場、寄席等の全盛であつたが、徐々にその客足を奪つて行き、浅野川界隈の繁華の中心的存在であつた。戦後は映画館として、昭和劇場の名のもとに長く親しまれていた。しかし自らが劇場・寄席を衰退させて行つたように、テレビの普

及とともに映画産業はすたれて行つた。

今は太陽生命保険相互金沢支社となり、堅実な中にも地元界隈に貢献している。

石野町一丁・二丁・高木町・尾張町二の八の二〇

先祖は播磨地区の豪族であり、前田家に仕えて金沢に来て禄をはんだ。商いは分家した子孫の初代伊助によつて、合羽商としての家業が袋町で始められたとされている。当初は和紙に桐油を引いた雨しのぎの油紙や、布製の道中合羽を販んでおり、代々加賀藩御用商人としての地歩を確保していた。今に伝わる「紙合羽出来品」と書かれた古い看板が、当時の様子と歴史を偲ばせるものとなつてゐる。

伊助は世襲されたようであり、三代目までその名を引継いでいる。四代目要次郎の時に明治維新となり、前田藩の消滅と共にしばし商売の低迷する時期が続く。間もなく、中興の祖とされる五代目要吉がこの尾張町に店を開いて帆布製品を新たに取り始め、又秘伝の油紙で合羽を取扱うことで再び発展の原動力を取戻し始める。人によつてはこの桐油の香りに昔の人情を感じることがあるといふ。この年、明治四十二年（一九〇九）を実質的な創業の年と定めているのもうなづける。新町工場に「手まめ、足忠実」と書かれた額入りの家訓が、商いし続けたしぶとい堅実さを物語つてゐる。さらに大正年間に至り、当時先進

的とされたミシン機械の導入を得て、ゴム引きの雨合羽の縫製を開始し、機械設備の拡充と共に西洋渡来のテント部門もいち早く併用するにまで発展する。

戦時中はこれらの実績のもと、舞鶴海軍工廠の重要指定工場として軍需に対応する。戦後、昭和二十二年（一九四七）、商号を石野雨具店から「石野テント商会」と改める。そして昭和三十二年（一九五七）六代目の現店主秀雄の就任のもとに、これ等の蓄積された実績と技術を生かし、発展的にテント部門・雨合羽部門の専門店として、広く現代社会を先取り、対応するに至る。石川県テント商工会の会長を約三十年に渡って勤め上げ、現在は金沢育色申告会副会長として活躍中。

小島理容谷 実 尾張町二の八の一八

金石の生まれで次男であった正二氏は、自ら技術を取得すべく大阪の床屋で十二年間修業生活を送った。昭和七年二月金沢に戻り、尾張町に独立して店を開店するに至る。厳しい努力をして技術を取得した正二はまた、これから開業しようと意欲に燃える若者の気持を自らの経験に照らしてよく理解し、後輩の育成にも積極的に当たつて来た。個人の理容室としてこの近隣諸県で最大の五十人に余る弟子を輩出独立させていることは特筆に値するといえよう。筆者等この店以外、安心して椅子に座ることが出来ない程、技術的にも人

間的にも信頼しきつてゐる。

こうしたファンは近隣に数多くおり、昭和五十三年に二代目を引継いだ正もじつくりと修業した上でハサミを持つてゐるので、本物を求める客で店内は賑わつてゐる。駐車場には高級車が並び、客層の高さを示すとともに、誰にでも安心出来る雰囲気は見逃せない。昭和六十年十二月にビルを新築し、ヘアーサロン・ムッシュコジマとし、より一層の顧客サービスの向上を図つてゐる。現在石川県理容組合の役員をし、一方尾張町若手会の一員として新しい街作りに励んでゐる。

細字印房店 尾張町二の九の二二

細字家の由来は口伝によると藤原鎌足の末裔で現在の三重県の豪族でありました。源平壇の浦の戦に平家方に加担して利あらず、後尾張の国荒子で薬種商を営み六代続いた。七代目が生来手先が器用だったため、印判師に転業した。当時織田信長は全国各地から百人の印判師を京都に集め、ポルトガル人の講師の下に一年間の講習をして特別優秀者三名を選び、これに「さゝじ」「細字」の姓を与えた。その内の一人が七代左平であり、印判師としての初代であつた。

初代細字左平は、京都で「吾唯足知」の四字を丸型石材に楷書で彫刻し、後に水戸光圀に

よつて龍安寺に奉納された。左平は尾張荒子の生まれで前田利家と同郷であつたため、利家が金沢入城の後天正十六年（一五八八）三月召し抱えられ、御用印判師として尾張町の現在地を賜り創業の年とする。利家の信頼が厚かつたところから帶刀を許されており、又後に利家が出陣の際に守り神として身につけていた木像の阿弥陀如来を拝領した。

初代左平の遺作は竹のれんで、店にかけてある「不知足者唯富而貧」である。その後、代々は左平を襲名し、五代目は勘定奉行から「御用」の看板をもらつてゐる。八代左平の時は三千年以前インドよりシルクロードを経て中国に渡り朝鮮から渡來した百八体の大黒様の絵像（彫刻したもの）の軸を入手したと言い伝えられる。また九代目は人形を大野弁吉に習い、大橋貞丈を俳句の友としていた。藩札の印影の押型は、藩主十四代慶寧の時に彫刻し、印章の印材は全部鎌印と銅印であり、その紙は二俣の和紙を使用して金額はすべて手書きで作られていた。十代は北方心泉に書道、巖如春に絵を取得し、その朱肉実押型帳は現在も保存されている。藩祖前田利家公より十四代慶寧公の時代まで唯一軒の印判店として許可されていたものであり、判木（現代の新聞紙にかわるもの）に関係する者が七十人程であつたと伝えられる。

現店主十一代目は今も昔ながらの技法を実直に受継ぎ、日夜神仏先祖代々に心から感謝しながら「今日も生かされておることを」喜び、今後とも真心をもつて世の人々のために印

章師として奉仕し家業を守っている。十二代目も店を手伝つており、四百年続く老舗の真髓を教えられる思いである。

佐野商舗 尾張町二の九の二〇

初代関平造は、明治維新に富山県高岡市で銅器製造問屋を開き、優秀な原型作家と経験豊かな鋳造職人との協力によつて毎年数多くの逸品を生み出し、販路も北陸はもとより関東・京阪神にまで及んだ。又、広く外国に輸出したため、世界万国博覧会に毎回出品して数回入賞作品を出している。

二代目は、次男崎司郎が分家して大正十三年十二月金沢の香林坊に移り、廻船問屋を先祖に持つ遠縁の佐野家の養子となり、佐野銅器店を開店した。高岡の協力工場を数箇所持つて初代に劣らぬ逸品を生み出して着実な経営を行なつていつた。昭和二年には尾張町に移り、業務の拡大に伴い同五年には佐野銅器舗と改称した。この間、県下小中学校の銅像の八々九割までを製作するに至つた。

戦争中は國をあげて金属類の供出のため、一時期は低迷したもの、戦後はまたたく間に復活した。昭和二十二年より、伝統工芸の加賀象嵌(ぞうがん)を中心に、仏具の製造並びに金属工芸品に力を注いだ。昭和二十六年、佐野商舗と現在の店名に改称する。

三代目佐野渥美は、昭和四十二年六月に家業を引継ぐ。日まぐるしく変わる社会の中で、加賀象嵌の伝統をしつかりと守り、家業の充実を図ることとなる。昭和五十一年には時代の動向を先取りして店舗をビル化し、伝統と近代化を合わせ持つ魅力を得ることになる。昭和五十七年には、加賀百万石の金沢のシンボル前田利家公の銅像を白鳥路の兼六園口の縁地に建てて、訪れる観光客や市民の目を楽しませている。

加賀象嵌は、白銅と銅もしくは錫と銅を主な合金材料とした生地に、銀ないし金を底広の台形に掘つて、はめ込み彫金するのがその特徴である。他の象嵌細工のように、ただ単に真っすぐに掘ると異なり、手間ひまはかかるが剝離しにくい高度な技法である。本物を求める世の風潮を受け、今頑固なまでの経営姿勢は失うべきではない貴重さを見せている。

ふとんのタカハシ 尾張町二の九の一八

同店は遠く江戸時代、元禄年間より刀の鞘師であったが、明治維新後、麻糸とカヤ製造業に換つた。カヤも原糸は麻糸であり、我郷土金沢は古来カヤは重要寝具の一つであった。長く郷土カヤの専門店であつたが、今次終戦後ふとんの製造販売に変つた。

代々与右衛門を世襲し、当初はあたらしやを姓としていたが、現在は高橋の姓を名乗り、

十四代目の現店主はいよいよ意欲に燃えている。

ムコダ 尾張町二の一〇の一八

文政元年（一八一八）、初代越中屋太助は、富山県西砺波郡向田村より金沢市袋町に住み、古着商を営む。文政六年（一八二三）、越中屋武助（二代）は太助と共に、加賀藩の製造に着手し、加賀藩の御用達となり、明治に入り向田の姓を名乗る。三代武吉は三浦彦太郎氏と共にドイツより落打機を輸入し、横山町に工場を設け、従来の手打式製法を機械打に改善。明治三十年（一八九七）三月、金沢商工会議所議員を勤める。明治末期より四代孫一郎は業務を引継ぎ、箔業に専念。大正元年（一九一二）石川県より支那中国の産業調査嘱託を受け、派遣される。同六年（一九一七）孫一郎は金沢商工会議所議員となる。同十一年、三代武吉（武翁）は永年業界の販路拡張と新製品の開拓の功労を讃えられ、金沢箔同業組合より銅像を贈られる。大正中期、大蔵省指定金銀地金販売商の許可を受ける。

戦中、横山町工場は舞鶴海軍工廠の専属工場として協力、終戦を迎える。戦後、現在地にて宝石・時計・記念品の店舗を開き、即営業を再開し現在に至る。昭和二十七年（一九五二）、資本金一〇〇万円にて法人組織に改組。福井市二の丸に支店開設。店名を「株式会社ムコダ」とする。同三十四年（一九五二）、四代武吉死去と同時に外茂次は五代武吉を襲

名する。

昭和三十八年、ムコダ片町店開設。同四十二年、尾張町本店を現社屋に改築落成する。同四十五年、創業一五〇年を迎えて感謝式典をM.R.Oホールで挙行。同四十八年、旧新町にムコダ別館を改築落成。同五十一年、片町ファッションビル・エルにブティック専門店ショルジュサンクを出店。昭和五十六年片町ムコダビルを開店し、エルビルのブティック部門を吸収し、二階にて開業し、一階は宝石・貴金属・時計コーナーとした。尾張町商店街振興組合の理事長として、尾張町の未来を担つて、現社長は今ますます意欲に燃えていふと言えよう。

村上洋品店 尾張町二の一〇の一七

昭和九年、三田商店の大番頭として勤め上げていた村上甚太郎氏が、同店の閉店を機に尾張町で店舗を構えたのを創業とする。長年の経験が村上洋品店として花開き、世の西洋ハイカラ風潮とも合い、着実な発展を遂げてきた。その実績を証明するかのように、甚太郎は昭和四十三年より尾張町振興会会長を務めていたし、商工会議所議員としても活躍していた。昭和三十九年には、金沢ビル(都ホテル商店街)に新店舗を開設し、売上向上と共に観光客に金沢人のセンスの良さを示すことに一役買っている。

昭和五十四年より隆が二代目となり、さらに近代的なセンスのもと、洋品店の在るべき姿を模索している。父同様に商工会議所とのつながりは密接であり、金沢販売士協会の会長職のもと、業界内では指導的立場にある。昭和五十七年には、百万石行列で前田利家公の役に扮し、大好評だったのは今なお記憶に新しい。過去をたどると初代甚太郎も前田利家公の役をしており、親子二代の馬上姿はそのまま金沢の商工業に対する貢献度を表しているといえる。

山田時計店　尾張町二の一〇の一五

明治五年（一八七三）の創業で、北陸で最も古い時計店といわれる。初代勝見の一族は金沢藩士であり、いわば武家の商法の典型であった。しかし、やがてその子勝二、右左美兄弟に受け継がれ、時計装身具を商い、今日の基礎を築いた。現店舗は当初尾張町支店であったが、本店を凌駕する勢いは熱い人力のたゆまぬ努力の賜物であったと信じる。

明治四十年（一九〇七）代に蜡管式蓄音機が輸入されると、いち早く取扱い（現在も当店に展示してある）その後、第一次大戦後は売上高が格段の伸びを示したばかりでなく、取扱い品も極度に増加した。当時の広告を見ると、それには「各種時計」の外に「晴雨計、寒暖計、凹凸眼鏡、宝石入彫刻印合、指輪各種、貴金属品各種、金製手釦、金縁眼鏡、平円

盛式発音器」とある。そして、昭和三年（一九二八）には、株式会社に改組し、従来通りセイコー代理店として、小売のほかに卸を統けて、北陸三県ばかりでなく、東北六県北海道まで販路を伸ばした。現社長勝二（襲名）は先代死後、昭和三十八年社長となり、現店舗を昭和四十年に改築し、昭和四十五年（一九七〇）卸部門を分離独立させる。またこの外各種記念品、工芸品、レコード及び音響製品等をも扱い、時代に順応した経営方針を樹立すべく、着々と新しい企画を検討している。

武部サイクル商会（合晋不動産センター） 尾張町二の一一の二六

大正二年、時代の最先端を一早くつかんだ盛三氏が、武部サイクル商会として自転車・オートバイを取扱つたのに始まる。当時は、北陸四県を見回してもここ一軒だけという珍しい商売でありました。新しいものだけに、国産製品は皆無に等しく、ハーレイ、インディアンといった名車がずらりと並ぶ姿は壯観なものだったそうです。売る側も苦労はありますでしたが、順調にお客もつき北陸随一の発展をして行きました。私達に馴染みのホンダ、ヤマハ、スズキといった国産オートバイはようやく戦後になつてから店頭を飾るようになつたとか。昭和三十年には尾張町に進出し、日本楽器跡に現在の店舗を構えました。

昭和四十四年、石川県不動産総合センターが発足し、間もなく昭和四十五年には発展的

に同センターを組織替えして、武部みどりが代表となり、合晋（あいしん）不動産センターを設立しました。

現在は守男が合晋不動産センターを継ぎ、昭和六十年十二月より若々しい柔軟さで活躍しております。地域のお世話を第一義とし、動かざる土地（不動産）を「まごころ」で移す心意気は、武部サイクル以来の商人の気持ちを表しています。浅野川消防団、金沢青年実業クラブ、尾張町若手会など巾広い活動をしているのも頷ける道理です。

森林忠^{山岡庄口} 尾張町二の一の二四

森敏雄（十四代目）菜種、油脂製品卸。創設者名森忠三郎、この店を「森忠」という。創業前の大正四年（一九〇七）、金沢城炎上の際、藩主前田斉広の命により御造官方肝煎を命ぜられ、資金の斡旋、資材などの調達にあたり、同五年完了。この功により二人扶持を賜り、町年寄を拝命。ついで同十二年八月に苗字帯刀を許されている。天保十四年（一八四三）、金沢の橋場町で御細工所御用商人として、うるし商を創業し、廃藩置県となるや、昭和五年（一九七二）頃、現在地に移住し油専業となる。かくて、時代の変遷を経て、菜種油、石油の時代から省エネ時代となり、取扱い品目も塗料、接着剤、床油等の多方面にわたる。十三代目当主幸朔は、昭和五十三年五月「尾張町物語」を研究発表し、本六十一年に商店街

として再版されている。現在は十四代目で、先祖の家訓を守る堅実な営業は老舗の風格を持つにふさわしい。

森八本店 尾張町二の一二の一

森八の商標「蛇玉」は一六世紀の頃、森八家の始祖亀田大隅が使用した紋章にその起源を求める。その遺子宗兵衛は紺屋敷に住み、名を森下屋八左衛門と改名、それが初代である。この森下屋は、現在本社のある尾張町に移住し、寛永二年（一六二五）に菓子業を創業した。三代目の時、小堀遠州の筆になる「長生殿」の三字を原型として名菓長生殿が生まれた。森下屋の屋号は、江戸末期に「森下」、さらに明治初期には現在の社名「森八」（森下屋八左衛門の森と八をとつて）と改称。ついで明治末期に森下屋の畠威中宮茂吉が事業を継ぎ、第十五代当主となり、これを合名会社に新発足。今次大戦による休業という苦境をくぐりぬけ、戦後再スタートを切り、昭和四十一年に本社も鉄筋化し、翌四十二年に新しく株式会社森八へと近代化した。さらに昭和五十二年には、工場も完成し、地元における菓子舗の老舗として名声が高い。

昭和五十九年嘉裕が第十八代当主として就任。昭和六十一年には本店及び後方の自宅を含めて大改造し、森八本店を核にした美味村を創る。

美味村 尾張町二の一(二)の一

“おいしいむら”と呼ぶ。和菓子の老舗・森八本店の地に金沢の本物の味覚が集まり、ひとつの村となつてゐる。「森八本店」。うま煮、かす漬け等の「おいしい良心・壺屋」。加賀越の「宮田」。あめ、甘納豆等の「菓心」が並んでゐる。そして小公園のような中庭の奥には、お弁当・お茶処「一粹庵」があり、一茶室庵にて、鏡花の名章を按じて一憩、森八の名菓を食しつつ尾張町の伝統の煮りと味に浸るのも風情がある。

橋向 坂場 町

(懸作り)

江戸初期から上期にかけて掛作りの仮屋を設けて、当時の常識を破り店頭に貸衣装等を並べる商売が繁盛したことからこの付近を「懸作り」とも呼ぶ。武士、庶民の別を問わず誰でもが気軽に表通りより店内を覗けるので、次第に人が集まり賑わっていた。

明治からは並木町の尾山俱楽部劇場、寄席の一九席、劇場の福助座を近くに持ち、主計町の三味線の音が浅野川のせせらぎに合して、えもいわれぬ麻畔情緒をかもしだす風情であつた。石川県里程元標が建てられることで金沢の交通の要所ともなり、尾張町の老舗とともに一番の繁華街を現出させ、流行の先端を行くものでした。

東田漢法堂　尾張町一の七の一三

「まむし黒焼」のうろこ看板が偉容を誇っている。店内に入ると、木の戸櫋（アルミサッシでない）にまむしの黒焼の入ったガラス瓶がズラリと並び、一朝一端に揃つたものでないことが一目で分る。コブラ、ハブ、鹿やサイの角、スッポン、猿の頭を素焼きのつぼに入れて焼いた黒焼まである。その他薬草類は三百種類にも及ぶという。

大正五年に初代久太郎氏の創業になり、現店主の次郎さんは昭和十年に二代目を引継いでいる。最近はスタミナ食として「まむし」が若い男性に注目されているが、《必ず効くと

は私の方から申せませんし、勧めません。でも何千年と語りつないできた茶ですから」と変動する時の流れに平然としておられます。

そういえば、この店名は漢方堂でなく漢法堂となつてゐる。「法」を使つてゐるのは、のり、おきてとも呼び、仏法のおしえにも通じるので仏教的な意味を考えたのだそうです。又これは昔の僧侶が人々を病氣から救うためにしていたことなので、あえて方→法として使つた次第とか。教えられる思いが致します。

大 橋 長 左 衛 門 橋 場 町 二 の 一 七

金沢の茶道を語るときに、忘れることが出来ないのが大樋焼きを始めとする茶道具の数々である。京都以外では全国で金沢しか茶道具を県内でもかなえる処はないといわれる。この寛文二年（一六六六）以来、約三百二十余年の歴史を持つ大樋焼きは、加賀藩の茶道具奉行として金沢へ赴いた千宗室に従つて来た陶工、楽一人の門人土師長左衛門が先祖になる。長左衛門は金沢東郊の大樋村の土を選び、この地で窯を造り、茶陶としての大樋焼きの歴史と伝統が出来たのである。

以後代々金沢の土を愛し、大樋長左衛門窯として現在に至る。楽の系統を踏襲して侘びたものが多く、金色を帯びた茶褐色の飴釉と呼ばれる釉薬に特徴があり、歴代独特の作柄

を競い合つて來た。九代目長左衛門は、伝統の茶陶としての大樋焼きの存在を確立させたことに大きな功績がある。

十代目長左衛門・年朗は、伝統を守りつつ、より大きく日本陶芸界における造形作家として歩んで行つた。日展に作品を出品して数々の賞を得、昭和四十二年には日展審査委員となり、昭和五十七年日展で文部大臣賞、昭和六十年日本芸術院賞を受賞している。現在日展理事、現代工芸美術家協会常任理事として、次代の長左衛門による新しい展開をしていいる。

橋場町の由緒正しい家の中を覗くと、店の奥庭には金沢の三銘木の一「折鶴の松」(金沢市文化財指定)が、まさに折り鶴のような姿で生えている。樹齢三百五十年の重味は、大樋焼き一筋の長左衛門の歴史を物語つてくれるかのようである。大樋焼きのトロケルよう、飴茶盃と文化財の老松に古き侘びた陶家に金沢ならではの味わいを見せる。

金立城 様 橋場町二の二三

創業の土屋九兵衛氏は、しじみ売りを生業にしていたが、一念発起して料亭で修業し、現在地で料理屋を始めたのは明治二十三年(一八九〇)である。当初は味噌藏町で営業したりしていたが、縁あり加賀藩年寄衆の一人、前田孝敬の屋敷跡のこの地を得た訳である。

青葉がくれに城の門が見られたという庭はみごとなものであり、近年の橋場町のしつとりとした風情によく似合う。

明治三十年（一八九七）に、俳壇の革新的役割を果たしていた河東碧梧桐を「北声会」が招き、ここ金城樓で句会を行つてゐる。句作する若き詩人たちのこころを揺さぶり、引き付けるものが何かがあつたのである。この頃の利用客は、政・財界の御偉方たちの公私の会合の宴席の他に、上流家庭の家族連れや茶会の催し等があげられる。そして料理屋が現在のような膳を出したのは大正になつてからで、それまでは一・二の品を除いては茶会の会席の仕法というか、現在の中華料理風というか、鉢のものを参会者が各自小皿にとる風習であつた。こうした中で業績は伸び、料理にかけては戦い九兵衛の腕はますます冴えていたようである。

二代目、茂吉は茶人であつた。揃えた茶道具、陶器、庭石など是一流料亭として貴重な財産となつてゐる。一方、昭和三十三年には時代の推移を先取りして法人組織に改組し、株式会社金城樓とする程の経営センスの持主でもあつた。

三代目外治は、変動する社会について行けずに多くの名ある料亭が姿を消す中で、「鷹の羽」「金久」といった個性的な割烹を展開し、又東京へ進出するなど事業家としての才を示している。そして先代より夕方五時頃となると、毎日配膳場の脇に座る。その日の料理

を自分で吟味し、板場の流れを監視してお客様に喜んで貰えるよう地道な配慮を欠かさない。本当に安心して加賀の味を賞味出来る貴重な店である。

株式会社履物舗 橋場町三の一

明治時代中頃に初代俵九兵衛が和装履物の店としてこの地で開業したのに始まる。以来二代目藤太郎、三代目彦一と続き、四代目勢一が昭和二十六年に引継ぎ現在に至る。

戦前まで履物のゲタはほとんど職人の手作りであったという。店主が自分で材料を吟味して仕入れ、その扱い勝手を考えて職人に指図しながら仕上げたものは、履いてみないと良さが分らない。学生さんには厚歯のものを、ご婦人には高ゲタをとそれぞれの用途に合ったものを最良の状態でお分けする気持を常に持っています。話し込むと、冬場の婦人ゲタは昔は後歯(後が一本で前は斜めに上っている)だったが、最近は晴雨履き(二つ歯)になっているがその効用はと、いろいろな種類を述べながら説明する一家言の持ち主です。昭和三十年以降始めた靴も、常にお客様本位の販売姿勢が着実な実績に現れています。

金子牛花店 橋場町三の一七

創業は安永十年(一七八一)にまで遡のぼる。初代、越中屋平吉が当地で花問屋を開いた

のが始まりである。二代目次右衛門、三代目次三郎、四代目次一、現店主健吾と続く老舗の偉容を誇る。

三・四代目の頃より、東京の東園と取引を重ね、又名古屋高畠地区の五色葉ボタンを北海道をはじめ全国に広めた。取引範囲も東京、遠州、名古屋周辺、関西方面との交流も盛んとなり、北陸三県はいうに及ばず、北海道、樺太(サハリン)方面へも卸売りを始めた。一方、卯辰山に六千歩余りの農場を持ち、五葉松、桜、梅、桃、椿(西王母)はじめ各種樹木、草花、茶花類を植え、現在も続いている。

昭和二十四年に株式会社金子生花店と店名を改め、地元の業界・組合の指導的立場として営業の繁栄に尽くしている。

ト一商店 橋場町四の一

明治四年(一八七一)、初代勝木兵蔵が梅本町の藩士丹波氏屋敷跡で開業したのが創業となる。ト一の屋号の由来は、「上」の字を二分割したもので、上等の意味を込めていた。当時スキヤキ一人前は一錢五厘であり、まだまだ庶民の味という程には至らず、商売は苦勞したようである。

二代目林清雅はこれを引継いだものの、本多家の馬廻役三百石の旧藩士であったので、

農耕民族の風潮が色濃く残る社会の中では、四ツ足ものの商売はまかりならぬとして、親戚から絶交される始末であった。

やがて時代の推移とともに、次第に牛鍋ブームが到来したので、現在地に移転した。當時、尾山神社山門建設のために金沢に来ていた、オランダ技師ホイットマン氏の設計により、洋風三階建に店を改築して大いに繁盛した。

三代美太郎を経て、四代克夫は大正八年に至り五代永森徳松に譲り、自身は尾張町中程で巴屋食料品店を開業した。

現在は、永森の女婿の阿部順三が六代目を引継ぎ、食肉・スキヤキ・洋食・喫茶を經營し、庶民の街浅野川界隈を訪れる人々の舌を楽しませている。

林菓子舗 尾張町二の一四の一六

大正五年林宥次氏によつてこの業が創業された。生菓子専門を目指し、浅野川の賑わいに訪れるお客様の舌を如何に楽しませるかに苦心し、自身の生き甲斐とした生菓子の職人であった。

この気持は昭和二十一年に二代目を引継いだ橋消次に脈々と流れ、「栗千両」の銘菓を昭和二十七年に産むに至る。以後「万両」を発売し、界隈を訪れる人々に林菓子舗の名を上げ

て行つた。地域の世話も一途な性格を見込まれ、長年主計町の町会長を務め、町並保存と整備に情熱を燃やす気持の持主である。昭和六十年には技術の腕を上げて來た長男修一に三代目を譲つてゐる。

団塊の世代に生まれた修一も、職人としてのこころ意氣は先代譲りの筋金入りで、その厳しい仕事ぶりには定評がある。橋場町青年部部長をも務め、近年は尾張町若手会と合同で懸作りとともに発展して來た橋場町・尾張町界隈の再活性化に向つて活躍中である。

志村金物店　尾張町二の一四の二〇

現店主志村栄一は昭和五十八年に五代目を引継いだ、商売に関しては時代を的確に見通す俊英である。古さの中に新しさを、新しさの中に伝統をという言葉が似合う由緒深い店構えは近年には数少ないものになつてゐる。

二代目に至るまでは森下町で金物店を営み、三代目の頃この橋場町に出店して來た。四代目秀平氏は東山房の清水外良氏等とともに界隈の発展に尽力し、志村金物店の名を不動のものとしている。

牛坂家目六セントリー 尾張町一の六の一〇

指物師として初代牛坂与重氏が昭和初期にこの地で開業したのに始まる。当時は小さな小タンスや茶棚を職人を使って作り、個性を持つた営業をしていた。

昭和三十五年に与一が家業を受継ぎ、二代目となる頃から手作りのものだけでなく、家具屋として広く製品を仕入れて顧客の要望に柔軟に対応して行くようになる。ショールームも大胆に展開し、一早くお客様の求めるものを選び出し、満足度の向上に励む姿勢は老舗だからと甘えるものではない。歴史があるからこそ、さらに歴史を延ばすべく時代の先を読み取り、サービスに務める訳である。

昭和六十一年、長年培ってきた創業の意志を基本に長男の重一が三代目を受継ぎ、若い情熱を持って新しい時代が開かれようとしている。

主計町

浅野川の左岸大橋わきより一文橋(現中ノ橋)に至る辺までをいう。昔、富田主計の居邸のあつた付近である。金沢の花柳界は北、西、東、主計町と四廓あり、中でも一番こじんまりとしており、逆に芸には磨きがかかっていた。別名「流れ」ともいわれ、浅野川に面した情緒深さを現わしていた。

「我が居たる町は、一筋細長く東より西に爪先上りの小路なり。両側に見好げなる仕舞家のみぞ並びける。市中の中央の極めて好き土地なりしかど、此町は一端のみに大通りに連りて、一方の口は行き留りとなりたれば、往来少なかりき。朝より夕に至るまで、腕車、地車など一輛も過ぎるはあらず。美しき姿、富みたる寡婦、おとなしき女の童など、夢おだやかに日を送りぬ」と照葉狂言(泉鏡花)の一節が自然に浮かぶ。

新町

加能郷土辞彙には

「金沢の町名。尾張町の家屋が漸く増した後、新たにこの町を設けたので名づけられる。「三壺聞書」に、寛永十二年五月九日犀川河原町から出火して、尾張町・新町・中町の悉く焼失したことを載せているから、当時既に今の町割の如くであつたのであろう。元禄九年の本町肝煎裁許附に新町・鍋町と載せる」とある。

いわば分家の町であり、尾張町ほど格式ばらず、当時の職人・芸術家・紳人が軒を並べる独特な風情のある町並だつたようである。

新橋

明治の始め頃はこの付近は突当りとなつており、鍵状になつていたので鍵町とも呼ばれていた。やがて新橋が出来ることで、橋場町へ抜けられるようになり人々に重宝がられていった。

泉鏡花がこの橋を好んでいたようであり、彼の小説「照葉狂言」等の舞台にも出てくる程度である。

福助座（和田歯科医院）尾張町二の一六の六五

藩政時代はこの付近に伊勢神宮の神宮、福井、土佐の止宿所があり神殿の飾りをなして豪社をきわめていた。明治四年には廃止されてしまい、その後ここに劇場が出来た。

梅若という者が經營する劇場であり、芝居を行い活況を呈していた。第四福助座ともいひ（第一～第三もあり、駅前の茶屋旅館や香林坊一〇九等が該当する）、金沢に於ける吉本興業の如き役割を果たしていったといわれる。新橋の聞通、近所の一九席もあり人々の娯楽の中心地であった。

ラジオの普及、活動写真の台頭がやがてこれらの芝居のすたれる原因となり、現在は和田歯科医院となつている。右横の小路に入つて行くと、石階段を降りて主計町となる。

白水鏡花生家跡

泉鏡花（一八七三～一九三九）は小説家。本名は泉鏡太郎。金沢の彫金象眼細工師泉清次（工名政光）の長男として明治元年（一八七三）、金沢市下新町（現尾張町二丁目）に生まれた。出生は、今の森八本店の後側である。母は鈴で、その生家は江戸の鼓師である。母の兄は宝生流の能楽師であり、維新後貧に入つた能楽に活を入れる意味にて、我が出生の一歩下った主計町（遊廓）を己の一部とし、毎日三味線の音を耳にして育つ。故に能楽「中の舞」に三

味線を入れ、新しい能楽を案出、新町分署の処（現高田医院の処）に演じてみせた。是れが時人に的し、やがて能楽復興の大きい萌ともなつた訳である。その他「照葉狂言」「義血快血」等多く、自らの生地界限（野口の別荘より尾張町全般）を舞台とする小説を多くつくりた。

初めて読む者には、強い個性的な文章で若干の慣れが必要である。しかし一旦彼の人情味溢れる感性を発見してしまふと、魂の深い部分でのふれあいは忘れる出来ないものになることであろう。

佃食口印 尾張町二の一六の七〇

昭和二十一年、大阪より帰った佃佐吉氏が佃佐吉商店を開いたのが創業となる。自らの佃姓と佃煮の関連に天の啓示を受ける如く、当初の苦節を乗り越えて行つたとのこと。河北潟の干拓に伴つて原料の供給を絶たれそうになつたり、数えればきりがないが、一つ一つ解決して來た。昭和四十年に佃食品株式会社と改め、翌年本社ビル建設、昭和四十七年には大場工場を新築する。

昭和四十九年長男の一成が二代目を引継ぐ。毛利一族の三本の矢の例えのように兄弟揃つて力を合わせ、佃煮の新しい可能性を追及しチャレンジする柔軟で若い店である。お客様

に対するサービスも心の通つたものにしなければならないとして、最近は社長を筆頭に社員にお茶・お花を習わせている。しかも、これが営業時間内のことであり、費用も全額会社持ち、おまけに役員昇任の基本条件とか。本店内には誰でも気軽にのめるようにお茶室もある。キャプテン・システムといった高度情報化社会を一方で先取りしながら、人間の感性を大切にする店である。

久保市神社 尾張町二の一六の七二

久保市乙剣宮神社といい、もと久保市山金剛寺といひ、真言宗法住坊之に奉仕した。初め、金沢の新町にあつたが、その地が西尾隼人の屋敷となつたが為、慶長六年（一六〇一）卯辰山に移された。祭神は、寺記に「白山第四之御子乙剣大明神本地不動明王」とあり、式内等旧社記には「窪市乙剣神社。金沢窪市鎮座。称乙剣大明神。白山比咩神御子。旧社也。」とある。明治元年、神仏混淆廃止を指示された後、別当は復飾して久保市金悟と称して神職となり、明治九年（一八七六）五月新町の旧地に復した。

卯辰山に移った金剛寺の場所を聞かれるが、「加能郷土辞彙」は

慶長六年神靈と共に新町から卯辰山に移され、宝泉坊の向かい賢聖坊の隣地に居た。
と述べてある。幕末から明治初期にかけて、同社に伝わる、補部芸台編の「能楽囃謡記録」

があつたそつだが、今は不明になつてゐる。

新町分里右（高田整形外科内科医院） 尾張町二の一六の八三

藩政時代は金沢城正門である大手門の正面突当りになるため、だれもここに常設の建物を建てようとはしなかつた処であつた。草や木が生えており、時折ムシロや蚊帳を張る程度であつた。

明治に入つて廃藩置県とともにこうした配慮もなくなり、寄席等が開かれるようになつた。泉鏡花が新しい能楽を試演したのもこの場所である。

やがて時代が下り、金沢警察署の分署が出来、現在の高田整形外科内科医院に至る。

木倉田庄 尾張町二の六の三〇

同店が万延元年（一八六〇）、藩の奉行所へ提出した由緒帳によれば、先祖は越前藤島村出身で天正七年（一五七九）一向一揆の真っ最中の金沢へ来て店を開いたとある。初代は喜左衛門、二代目は覚左衛門、三代目は再び喜左衛門を名乗つてゐるが、四代目からは代々長右衛門となる。この頃までは特に定まつた商売をしておらず、五代目長右衛門が何か良い商売はないかと田井天満宮（現椿原神社）へ祈願したところ、或る夜夢まくらでびんつけ

油の製造の技法を知らせられる。その名も「梅がえ」と名付けてびんつけ油を売り出したところ、男性・女性ともに大好評を得る。明暦三年（一六五七）片町に間口だけで三十メートルもある店を構えることが出来る程に発展して行った。天和元年（一六八二）藩侯より御櫛苟用、広式向きの御用を正式に賜り、その後家柄町人として苗字帯刀を許された。城下の有名商店番付「三都古今取組商人玉集」には東の大関としてトップを飾っている。明治に入り、びんつけ油の他インクの販売を行い、尾張町に支店を開設した。時代は下って太平洋戦争時代は商品の売れ行きは減り、片町の本店は終戦後間もなく閉店した。しかし木倉屋のれんは支店の分家筋によつて守られている。

現在の木倉屋鉢造は創業以来十五代目であり、加賀友禅袋物、趣味小物、加賀象嵌アクリセサリーを生業とし、広く北陸から東京・大阪へと販路を持つている。

石谷 尾張町二の六の四五

元禄元年に活躍していたといわれる石屋藤兵衛にまで先祖は遡のぼる。代々藤兵衛を世襲して來たが、明治維新の頃にこの名字を使うことを禁止され、石屋から石谷と変え、読みも「じしや」から「いしたに」とする。

現在地に來たのは大正初期の頃、十一代目石谷伊右衛門になつてからである。味噌か醤

油屋をしていた家にそのまま入つたので、今でも蔵が多い。伊右衛門は個人で銀行を始め、堅実な経営手腕をもってその蔵の中に財を積み上げて行つた。

十二代目の伊三郎は第一土地株式会社を設立し、これが興行会社としての発展を促進することになる。昭和十二年には香林坊松竹座を取得経営し、火災後の第二菊水(昭和劇場)を取得経営する。並木町の尾山俱楽部も当社の経営になるものであり、こうした当時の繁華街に持つていた著名劇場とともに当社は経営方針通り広く庶民を楽しませ、又人々に多くの思い出を作つて來た。一方、戦後は紙問屋の三藤商事を発足させ今に至る。

現在は昭和四十八年に十三代目を引継いだ伊佐美が変動する社会情勢の中、先代譲りの経営感覚で時代の要請するものを的確に捕え、株式会社石谷の堅実な経営を行つている。

武蔵ヶ辻

加能郷土辞彙には

金沢堤町と袋町及び近江町と安江町間の十字路をいふ。往昔、武蔵庄兵衛の邸地がここに在ったに因つて名を得る。とあり、同じく日置謙先生は、武蔵庄兵衛は金沢家柄町人の一人。その元祖は石黒庄兵衛とも武蔵庄兵衛とも称し、城州伏見に居住して前田利家の伏見に居た頃、諸事用向きを承り、次いで金沢に移り、慶長十七年に歿した。二代庄兵衛は、利常の時の人で、寛永十八年歿し、その後代々庄兵衛の名を襲いで町年寄に任じ、藩侯謁見の特典を得、その家の在る所を遂に武蔵ヶ辻と称せられるに至つたが、明治二十一年屋敷を売却して去つたと言われる。

丸越百貨店 (ダイエー) 尾張町二の一の一

林屋龜次郎氏が、昭和五年に金沢ビルディング会社を設立し、百貨店経営を始めたのが創業となる。当初は三越百貨店と提携し、昭和十年丸越百貨店として独立する。俗にいう林屋商法の実力を世に問うた時期が訪れた訳である。昭和十八年、戦争による企業合併で一時期宮市大丸と合併(大和)したこともあつたが、昭和二十五年には再び丸越百貨店となつた。戦後の復興の中で、武蔵界隈の商業のシンボルとして活躍しつつ、昭和三十八年には名鉄百貨店が資本参加し、着実に経営基盤の充実を行つた。そして武蔵ヶ辻第二地

区市街地再開発計画に基き、昭和四十八年十月に金沢スカイビルが建設された時に、社名を株式会社金沢名鉄丸越百貨店に改称し、キー・テナントとして、交差点の斜め向いに店舗を移転して大飛躍が始まる。金沢スカイホテル、スカイプラザ、ニュースカイプラザとともに、現在は個性的で商人気質にあふれた百貨店として金沢庶民に親しまれている。

丸越旧店舗の跡地には昭和五十六年十月、神戸に本社を持つスーパー・ダイエーが金沢支店として出店する。金沢名鉄丸越百貨店や近江町市場とともに武蔵ヶ辻を訪れる人々の心をとらえている。

中六八商店 尾張町二の二の二五

市姫神社隣りに在り、創業文化十年（一八一三）。創設者中島六兵衛のもとで味噌・醤油等を商います。当主人中島清次八十四歳、四代目也。現地元蔵地にて向側店であったが、近江町焼けの折、市姫通り開通、現在となる。近江町黒川、豊町、北中各々旧家と親戚也。当店には珍しい二代目履歴書がある。

市姫神社 尾張町二の二の二三

〔祭神〕大市比賣神 恵比須神 大黒天神。〔由緒〕今をさる約四百年の昔、天文の頃、近

江国の高官の人が京都の市比賣宮に参籠して夢を見たお告げにより、加賀国石川郡にたどり着き、一社を建立して、市比賣神を祀り、家業に励んで産を成し、人々その徳を慕い寄り集り、住んで市をなした。(市姫宮縁起)

「沿革」加賀藩二代前田利長は市街地を整理し、市姫宮を中心とした町並を近江町と命名した。たまたま社地が金沢城防備の要衝をなす内惣構堀の内にあつたので、藩命により卯辰山の観音院(現在の豊國神社)の境内に移り、明治十二年(一八七九)現地に復座。明治三十七年(一九〇四)近江町焼けに罹災し、一時豊國神社(当時殿町)に勧座。同三十九年(一九〇六)本殿を再建、大正八年(一九一九)拝殿を再建した。

「市姫神社跡」玉鉢にあり。往昔魚市場盛りなりし頃、商売等の崇敬すること深かりしも、魚鳥市場の金沢に移るに及び、九郎兵衛といふもの之を近江町接待橋詰に遷せりと。その後久しく旧社地に老樹鬱蒼たりしも、耕地整理後水田となり、その所にありし石室を野間神社境内に遷されたり。(石川県石川郡誌)

中島めんや 尾張町二の一八

創業文久二年(一八六二)。創業当時は芝居や踊りの面類、小道具の製造を行い、屋号の「めんや」は「顔のあるかたちを創造する家」という意味である。

明治初期より、張子を中心とした現代の郷土玩具の製造販売を始め、現在でも昔乍らの製法で加賀八幡起上り、加賀獅子頭、加賀人形、張子の虎、米食ねずみ等の郷土玩具を製造している。

加賀八幡起上りこぼしは加賀国の特産、さかさまにしても起上るの意にして、病氣は全快、家貧はすぐ様戻るの象徴として、古来尊ばれてい。

不室屋 尾張町二の三の一

慶応元年（一八六五）、初代六右衛門が下近江町（現在地）に不室屋を創業。豆腐を主に食麸蒟蒻澱粉等の製造販売を行った。明治二十四年（一八九一）、二代徳三郎が後継し、販路をのばし、昭和十六年（一九四一）勇作が三代を受け継ぎ、蒟蒻部門を分離し、金沢合同製蒟蒻有限会社を設立する。昭和三十年（一九五五）七ツ屋町に工場を新設し、同三十二年（一九五七）法人組織とした。同五十四年（一九七九）営業の合理化をはかるため、株式会社加賀不室屋と社名を改めた。

寿屋 尾張町二の四の一三

金沢でただ一件の精進料理専門の寿屋である。大きな梁（金沢では「さしもん」という）を

むき出しにした、吹き抜けの天井（金沢で「ひぶくる」という）で、珍しい木造三階建て。夏もこの家の中はひいやりとして、別天地である。二階の一室から庭を眺め乍らの席がある。朱塗りの膳に朱塗りの器、それに白い胡麻とうふや、うどや、くわい等がほの明るく浮き上っている。電灯もつけない夕暮れ時、朱はどきつとするとほど鮮やかだった。仏事の朱塗り、祝ごとの時は黒塗りを使う。

器は全部輪島塗りで揃えてある。それが傷一つなく、今おろしたての器の様に初々しい。料理にかける時間と同じ様に、道具のあと始末に時間をかけるのだという。酬金で染めた黄色の木綿で袋を作り、一つ一つそれにくるんでから箱にしまっている。

「この袋は全部おばあさんが手で縫ったのです」

お給仕して下さるのが三十歳になつたばかりの若奥様、京子さん。話の相手をして下さるのが、これもまた若いご主人、長井正之さん。

「寿屋はおじいさんの代から始めました。料理屋の板前をしていたのですが一本立ちになります時、ご主人の店のお客さんとかち合つてはいけないので、精進料理にしました。今もおじいさんから受け継いだ味を守つておられます」

大和田銀行（福井銀行尾張町支店） 博労町六一

福井県敦賀で廻船問屋を営む大和田荘八の創業になる銀行の支店であった。明治二十五年に設立され、金沢には明治三十一年に進出する。当時士族の丁醜銀行に対し、庶民の丁稚銀行とも呼ばれていた。金沢支店のビル建設は昭和二年頃であり、大正十四年建設の大和田銀行本店と同じ建築様式を持ち、各支店の外観を統一していた。

昭和二十年十二月、大和田銀行は敦賀の一部を除きほとんどの支店を福井銀行に引渡した。金沢支店もこの時から福井銀行尾張町支店として模様替えし、新たな発展をすることになる。尾張町界隈の賑わいの中で、尾張町支店は着実に実績を上げ、金沢支店に次いで格式を持つものであった。現在、この建物の落着いた外観と、尾張町支店の地元商業界に於ける役割は見逃せないものである。

五十嵐風傘店 博労町六二

明治元年、五十嵐寅次郎氏が和傘及び提燈（ちょうちん）を製造販売し、これを創業の年とする。以来、竹の骨に和紙を貼り、荏油を中心調合した油を塗った昔懐しいじやのめ傘や提燈を一筋に商い続ける。大正年間には二代目保正が、昭和初期には三代目理三郎がそれぞれ家業を引き継ぎ、昭和二十三年より現在の英治が四代目を引き継ぐ。

英治の頃より洋傘も商い始め、提燈を主力に作り始める。石川県立美術館に出品してみたり、県の伝統工芸品産業に指定されている確かな技術は、金沢市内でも二、三人が取得しているにすぎない。店内には使いこなしたいいろいろな型板が置いてあり、伝統を語り掛けてくる。

金沢提燈の特徴は、竹骨を一本一本輪にして木綿で重合部を止めることがある。これにより、他の提燈の如く螺旋状に竹を巻かないで手間がかかる半面、伸びが大きく壊れにくい。念入りに作られた提燈をよく見ると、数本の木綿糸で縦に止めてある。最後の仕上に絵文字、紋等を入れて完成する。大量生産の既製品とは一味も二味も違う、ここらの通つた商品は飽きることがない。

近江町市場

文明十三年（一四八一）二月、真宗東派の願西が近江の国から商人を連れてきて、木ノ新保（今の下堤町の三竹屋付近）に圓善寺を建て、町づくりをしたという町名の由来がある。

通説では天正八年（一五八〇）佐久間盛政の時代に出来た古い町で、尾山八町の一つにその名がある。又「金沢古蹟志」には、寛永八年（一六三一）の石浦神社氏子地図に近江町のあたり今市村跡と記してあり、明和二年（一七六五）六月同慈光院書上状に、現在の今町・新

町のあたりに久保市という古くからの市場に対し、近江町あたりに今市という新しい市場が出来、この市場に人が住むようになり、今市村という集落が出来たとある。近江町という名がいつ成立したのか、古い資料である天文十五年（一五四六）の「天文日記」にはすでに近江町の名が載っている。

藩初の頃、新保屋次郎左衛門という者が、前田家の膳用を調えたのが袋町での市場の始まりと言われ、前田利長の高岡城遷居とともに次郎左衛門も高岡で屋敷地を賜わり、金沢と高岡の納入御用にあたつた。三代利常の時に至り、町民の要望により市場が開設された。市場は五ヶ所出来、一つは犀川口で今の豊町入口で魚屋町といつた。他の四つは浅野川口で、今でいえば袋町から上今町にあたる。当時は御算用場から受けた市場札を町内に掲げておいた。両魚市場に付随して青草市場も出来た。後に魚屋町の市場は、運送にも便利であり、又近江町に藩侯御膳用の魚鳥を貯蔵する雪穴があつた浅野川口の市場に合併され、享保三年（一七二五）に近江町に移された。

近江町市場の問屋は、価格の決定の独占権を持ち、営業も制限されていなかったために、商品を集荷し、自己の商品として仲買商人に売ることも出来た。これは周囲に小売商を発展させ、城下町の台所から現在の市場を形成したのに影響が強い。藩侯の御用をつとめるのでプライドも高く、威勢の良さを特徴に残している。

明治三十七年（一九〇四）八月に石川県の許可を得て、「官許育草辻市場」の標柱を建てた。大正十四年（一九二五）に金沢で初めて路面舗装し、天びん棒に川魚・しじみを担いで持ち込んだりして市民の台所として繁昌した。

戦争が始まり、一部市場は壊されたり物資の統制もあって寂れた。戦後、統制は廃止されだが、闇市と化して混乱したものの、着々と回復した。街灯をつけ、日覆天幕を張つたりする内、昭和三十一年アーケードを建設する。昭和四十一年には中央卸売市場が開設され、卸売問屋は全て西念町へ総合移転したため、小売専門市場となる。昭和五十三年、第一次食料品商業地区高度化モデル事業が完成。同五十六年、食料品小売業近代化事業が完成し、現在に至る。

加能合同銀行（北国銀行武蔵ヶ辻支店） 下堤町四二

昭和十八年、戦争の異常経済の中、この地にあつた加能合同銀行本店を基礎に、加州銀行と七尾市の能和銀行の三行が合併して北国銀行が誕生する。当初は、戦争中だから何度爆撃があるかもしだれず、その時に強い建物をと言う観点から新行の本店とされた。以来、地方銀行の雄として業務の発展・拡大に伴い、昭和三十三年三月本店を下堤町一へ移行し、ここを武蔵ヶ辻支店とした。本店を除けば同行内では筆頭の支店であることは今も変わり

ない。

昭和七年の加能合同銀行時代に建てられた鉄筋コンクリート三階建てビル（外観は二階建に見える）であり、スクラッチタイル貼りの柔らかな質感の壁面を、鋭く大胆に切り込んだ三個の砲弾型のアーチは、当時を偲ぶ個性的な面影をもつて私達に語りかけてくる。武蔵ヶ辻のシンボルとして親しまれている。

あとがき

参考文献「老舗百年」(金沢商工会議所刊)、「金沢商店街のあゆみ」(金沢商店街連盟刊)、「金沢の歴史的建築」(金沢市教育委員会刊)、「加能郷土辞彙」(日置謙著)を始め、石川郷土史学会の重鎮の方々にご意見等をお聞き致しましたが、何といつても尾張町界隈の古老や各店舗の店主及び関係各位の方々の話を最優先にして作成させて頂きました。「ムサン尾張町名所名店めぐり」及び「尾張町再発見おもしろ散歩」を実施してみて、忘れてはいけないものの多くあることに今更ながら驚き、同時にここに生まれ育ったことに愛郷の精神と誇りを覚えつつこの小冊子を出筆致しました。ただもしも文中、聞き間違いや調査ミス等については真摯な気持でお待ちしておりますので、どうかお教え願えれば幸いに存じます。

金沢発祥の地尾張町は山崎凹市から幾多の変遷を遂げて参りましたが、この町名が示すように尾張名古屋から来た前田家との関係が最も深い訳です。参勤交替には必ず金沢城正門の大手門より出入りし、又城内の武士が通用門として使つたのはその右手横の黒門であります。現在兼六園の前にある石川門は裏門であり、城主の庭(兼六園)への出入口でした。武蔵ヶ辻、近江町市場、橋場町(懸作り)、主計町という浅野川界隈の商業と文化の合流点であり、お城とともにあつた尾張町の姿が浮かぶことと思います。この底力を持つた尾張町の活性化は、近代化されつのある香林坊と対を成して行くものではないでしょうか。

日本は漢字を使用する国であり、中国と同様に縦に文字を書く文化の土壌を持つが故に、水平思考ではない垂直思考の歴史（祖先）を重んじるべきであることを、特に城下町の様子を多く残す金沢では見直すことが使命だと感じます。自らの手で街の由来を振り返ることにより、私達は先人がたどり着いた以上の未来へ向つて今後も進んで行きたいと考える次第です。

一九八七年一月吉日発行

尾張町商店街振興組合

理事長 向田 武吉

尾張町若手会

会長 石野 瑛一

表紙絵
金府図
(天保八年三月)

